

事業の背景・目的

北海道に生息する大型猛禽類は、列車や風車、車などへの衝突事故や鉛中毒などの人為的な要因で死傷事故が発生している。当園では、猛禽類の訓練専用施設の確保、傷病保護された猛禽類の野生復帰や、野生復帰が不可能な個体の繁殖への活用などを行ってきた。今後さらに大型猛禽類の保全を進めるためには、傷病個体が域外でファウンダーとなる可能性を模索する技術的な試みの推進も必要である。そのため、大型猛禽類の保全に資する各技術の開発に取り組む。また、それらについて普及啓発を行い、生息域内保全と域外保全の連携の必要性や、大型猛禽類と人との軋轢についても発信し、市民レベルで大型猛禽類の生物多様性について考える場を提供する。

事業の内容

事業① 技術開発

- ・ファウンダーとして可能性のある傷病個体の選択手法の確立に向けた検討材料の蓄積
- ・採精用オス個体の創出に向けた孵化前性判別の技術確立や検査体制の構築



事業② 普及啓発事業

- ・大型猛禽類シンポジウム「円山動物園が猛禽類専門家と考える大型猛禽類の未来」の開催（11/16）
会場：北海道大学学術交流会館
参加者：130人以上（満員）
- ・大型猛禽類ミニ講座「わくわく猛禽類トーク in 釧路」の開催（11/24）
会場：港まちべー946BANYA
参加者：85名（満員）



得られた成果

飛翔困難なオス個体でも、ペア個体の選定や同居の順番、餌の調整などの工夫により、闘争に至らず同居させることができた。交尾をしようとする様子が見られたが交尾の成立には至らなかった。また、人工授精用オス創出のための孵化前性判定については、有精卵1卵について採材を試みることができたが、中止卵となった。実用化に向けて、採材時期や方法、検査方法など、再現性のある手技の確立に向けて北海道大学と協力関係を構築することができた。普及啓発事業では、地域住民の猛禽類に対する関心を高めるだけでなく、実際に保全のために行動したいという地域住民を増やすことができた。普及啓発イベントについては地域住民からの反応が良く、次回開催も要望されている。本交付金事業終了後も、事業成果として得られた実績や体制を活用して、保全活動を継続していきたい。